様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2008
課題番号：19791774
研究課題名（和文）糖尿病療養指導士資格を持つ看護師による早期介入をめざした外来看護プログラムの構築
研究課題名（英文）Development of nursing system for diabetic outpatient by certified diabetes educator

研究代表者
平野　真紀(HIRANO MAKI)
公立大学法人　三重県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：60405230

研究成果の概要:本研究は糖尿病療養指導士資格を持つ看護師を中心とした外来看護プログラムを開発・導入し、糖尿病の早期治療に対する新たな治療戦略の一端を見出せるよう、早期介入の方向性を探ることを目的として行った。平成19年度にはプログラム実施予定病院の外来看護における現状調査および分析を行い、その結果をもとに平成20年度は外来システムの連携強化をおこなった。この結果、外来で糖尿病療養指導士資格を持つ看護師が行う糖尿病療養指導のアウトカムが明確化される取り組みとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,100,000	300,000	2,400,000

研究分野：地域・老年看護学
科研費の分科・細目：地域看護学
キーワード：糖尿病、外来看護、早期介入、糖尿病療養指導士

１．研究開始当初の背景

医療・保健福祉のニーズは、疾病構造の変化に伴い変化していく。近年の糖尿病患者の増加に伴う糖尿病専門医の不足を補うために、糖尿病患者の療養実態の改善・健康の向上を目指して日本糖尿病療養指導士（以下､CDE と示す)が平成 13 年に誕生し、数年が経過した。CDE の資格認定を受けた看護師(CDE-Ns と示す)の数は増え、CDE 資格取得に伴う実践や意識の変化が報告されている[1)]。しかしその一方で、従来からの病院内のシステム下ではCDE-Nsとしての能力を生かす場が少なく、資格取得後十分にその役割を果たせない実状があった。

また最近、糖尿病の早期発見、早期治療の重要性が特に強調され始めている。なぜなら、多くの疫学的研究から糖尿病が軽い時期に動脈硬化症が発症・進行することが解明され、心筋梗塞・脳梗塞の合併リスクを高めることがわかってきたためである。治療に関して、現在患者教育の主流な方法として糖尿病教育入院が用いられているが、診断後間もなく、また症状が顕在化していない患者にはその必要性を十分に認識させることは困難である。加えて糖尿病の最多初発年齢は50歳代であり、この年代は重要な社会的役割を担う時期でもあるため、職業・家庭の事情で入院を拒否する対象が多いことも教育入院を困難にする原因のひとつとなっている。これらのことは軽症例の糖尿病を放置することにもなりかねず、結果的に合併症のリスクを高めることにつながりかねない。

したがって、糖尿病初期患者をフォローアップすることによって早期治療を推進し、また糖尿病治療の専門家としてのCDE-Nsの能力を活用すべく、方策を練ることを通して糖尿病患者へのかかわりが量・質の両面においてよりよいものになるのか、具体的かつ効果的な環境整備を模索すべき段階にあるといえよう。

糖尿病の教育アプローチ法としてエンパワーメントアプローチの有効性が検証されてきている。エンパワーメントアプローチは「多理論統合モデル」に基づくアプローチ法であり、従来の心理・行動学理論のうち行動変化に必須な要素を統合的に取り入れ統合モデル化されたものである。この「多理論統合モデル」の中で根幹的な理論モデルとなっているのが、「ヘルス・ビリーフ・モデル」と「変化ステージモデル」である。この理論モデルによると、患者自らが自己の健康信念の特性に気づき自己の動機づけが可能となるべく援助をし、患者の行動の「変化ステージ」を見極めながら適切な時期に効果的な介入が行われることによって、患者に望ましい問題解決能力が定着するとされている。

第一に、従来の糖尿病教育は集団指導を中心にした患者への知識付与型の教育が行われていたが、個人の症状に直接訴えることができず、情報を個々の状態に合わせて与えられないことから患者の自主的な健康行動に結びつけられないという欠点があった。本研究が開発を試みるプログラムは、糖尿病患者に対し個別的に実施されるため患者自己の身体に即した問題として意識づけができ、糖尿病の自己管理行動への意識を高める効果が期待される。これは、近年の医療の標準化や糖尿病看護の標準化に関する議論の場でしばしば指摘されるような、患者の多様性に対応できる具体化に通じるものがあると考えた。

第二に、本研究で開発するプログラムは、病院内の他職種との連携を含めた、病院全体のプログラムとしての発展可能性がある。またこの外来看護システムを確立し、効果が認められれば、1つの病院にとどまらず、以後外来看護、CDE活動の有効的な活動のモデルケースとして多くの病院に拡大していける可能性があり、糖尿病早期治療、さらには病院を拠点とした新たなヘルスプロモーションの形態としてのベースモデルとなり得ると考えた。

第三に、CDE-Ns はその誕生以来、活動が期待されているにも関わらず、未だその活動は発展途上であり、本研究においてその方向性の一例の提示に発展させられると考えた。

以上のことから、本研究はエンパワーメントアプローチをプログラムにおける患者への共通の教育アプローチ方法として用いる。さらに患者個々の能力を効率的に上げることを目的として個別指導の手段をとる。この方法を取り入れることにより、患者の自立を助けるために援助の方向性を支援すること、つまり患者の「能力開化」をうながし、患者自己が自らの身体に即した問題として意識づけができることから、糖尿病管理行動への意識を高める効果が期待され

る。

２．研究の目的

本研究はエンパワーメントアプローチをプログラムにおける患者への共通の教育アプローチ方法として用い、1)CDE-Ns による、2)外来で行う、糖尿病患者への教育のためのシステムを考案し、導入する。これにより糖尿病の早期治療に対する新たな治療戦略の一端を見出せるよう、早期介入の方向性を探ることを目的とする。

目的 1) 糖尿病療養指導を行う糖尿病療養導資格をもつ看護師による療養指導の現状を把握する。

目的 2) 糖尿病療養指導資格をもつ看護師の外来糖尿病教育における役割を探索する。

目的 3) 目的 1、2 に基づくヒアリング調査をもとに糖尿病患者に対する、糖尿病療養指導士資格をもつ看護師が行う外来療養指導をはじめとした、一連の外来でのシステムの整備を行う。

３．研究の方法

糖尿病初期患者を外来でフォローアップすることによって早期治療を推進し、また糖尿病治療の専門家としてのCDE-Nsの能力を活用すべく、外来における具体的かつ効果的な環境整備を目指して、CDE-Nsの活動を促進するための体制作りを病院CDE-Nsと連携して推進した。

研究 1)

(1)研究デザイン

質的・帰納法的研究

(2)研究方法

調査方法：個人面接調査：半構造化面接を実施。

調査対象：継続的に外来で糖尿病療養指導を行っている CDE-Ns 5 名を対象とした。

(3)分析方法

研究方法は個別の半構造化面接調査において外来における糖尿病療養指導を通しての現状と課題、今後望む方向性について語ってもらい、トラスクリプトとして書き起こしたものをもとに、研究目的に沿って分析を行った。

(4)倫理的配慮

守秘義務の遵守、自由意思に基づく参加、データの二次使用を行わないこと等を明記して書面をもって研究参加への同意を得た。研究の調査・分析は研究者所属機関における研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

研究 2)

(1)研究デザイン

アクションリサーチ

(2)研究方法

研究 1 のヒアリング調査をもとに、外来役割の機能の明確化をはかり、外来と病棟の糖尿病教育の連携体制の整備を行う。

(3)分析方法

糖尿病療養導資格をもつ看護師の外来療養指導の達成度・満足度、および患者の行動変容の程度を評価する。

４．研究成果

研究 1)

CDE-Ns による外来療養指導における現状と課題を明らかにするための面接調査の結果、次の内容が明らかとなった。

外来で療養指導に応じる位置づけとしては、【継続的な関わりができる】、【患者の話を時間をかけて聞ける】、【生活に密着した援助が行える】という現状が明らかとなった。

次に CDE-Ns が関わることの意義としては、CDE-Ns であるということで【患者が興味をもって聞いてくれる】、【アドボケイトとしての立場に立てる】ことがあげられていた。

現状における課題としては、【システム整備の難しさ】、【一貫した教育の困難さ】、【療養指導のアウトカムの設定の困難さ】といった点が抽出された。

本研究の結果から、対象施設における CDE-Ns は外来での療養指導において自らの資格を活かしながら、外来患者の生活変化に沿って援助を行えていると実感している様子がうかがえた。その一方、この療養指導の

場において行えることの限界も感じているようであり、糖尿病教育がこれまで十分にされてこなかった患者に対する教育機会の必要性が課題として挙げられていた。この結果をもとに、研究 2) につなげ、CDE-Ns の活動を中心とした外来糖尿病教育システムの整備へと研究を発展させていった。

研究 2)

研究 1)のヒアリング調査の結果をもとに、糖尿病患者によりよい外来看護ケアが行える環境整備を現場の糖尿病認定看護師と連携して行った。対象施設の糖尿病認定看護師と協働し、外来療養指導およびその他の外来システム、病棟との連携の強化、フットケア外来の開設、さらには病棟との連携を含めた外来療養指導を取り巻くシステムの改善を行った。加えて、関連施設との情報共有をすすめ、医療職の専門性を生かした外来糖尿病教育システムの提案を行い、病院のニーズが反映される外来システムの整備の取り組みを実施した。

外来において医師の診察、CDE-Ns の療養指導の糖尿病療養指導に加えて、糖尿病認定看護師が主となって担当するフットケア外来の開設に至った。その結果、足病変の相談ケースについてはフットケア外来が中心となって療養指導に応じるよう外来における役割を明確化した。同時に、他職種の糖尿病教育への協力を求め、必要時に栄養士、薬剤師の療養指導を受けられる体制を整備した。また、それ以前十分ではなかった病棟との連携についても、糖尿病認定看護師が全病棟を巡回する体制が整えられ、エンパワーメントアプローチをベースとした糖尿病教育内容の統一をはかられることとなった。これら一連の外来のシステム整備を通して、糖尿病療養指導士資格をもつ看護師が行う外来療養指導の役割が明確化し、対応する看護師の満足度も向上する結果となった。

以上のように、療養指導の位置づけの明確化をはかり、外来における職種役割の明確化、また診療報酬の変更に伴った認定看護師によるフットケア外来設置などの外来看護役割の拡大につながり、各職種の専門を特化した連携体制を強めることを通して糖尿病患者を取り巻く外来看護のみならず外来システム全体の整備につながる成果が得られた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

1) 平野真紀,松井美貴:「糖尿病療養指導士資格を持つ看護師による外来療養指導における現状と課題の検討」,第 13 回日本糖尿病教育・看護学会,『第 13 回日本糖尿病教育・看護学会抄録集』,pp194,2008.9. 16,千葉.

2) 河本未樹,橋本典子,川口直子,中西里奈,松井美貴,平野真紀:「糖尿病療養指導士の資格を持つ看護師を中心とした外来における支援の検討」,第 12 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会,『第 12 回日本糖尿病教育・看護学会抄録集』,pp284,2007.9.7,石川.

６．研究組織

(1)研究代表者

平野　真紀(HIRANO MAKI)

公立大学法人　三重県立看護大学・看護学部・講師

研究者番号：60405230

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：